

論文の和文要旨

論文題目

バレエとプラスチックの狭間：20 世紀バレエ史における振付家レオニード・ヤコプソンの位置づけ

氏名

梶 彩子

本論文では、ソ連のバレエ振付家レオニード・ヤコプソン（Леонид Вениаминович Якобсон, 1904-1975）を取り上げ、彼の創作活動の再評価を行う。ヤコプソンはレーニングラード（現在のサンクトペテルブルク）のキーロフ劇場バレエ団を主な拠点として活躍したバレエ振付家である。1950 年のバレエ『シュラレー』の成功をきっかけに振付家としての地位を確立し、以後、クラシック・バレエだけにとらわれない自由な発想で、自らの創作活動の道を邁進した。晩年（1969～1975 年）には悲願の彼自身のバレエ団〈舞踊ミニアチュール〉を手に入れ、そこで亡くなる直前まで振付けを行った。同時代人は、作品それぞれに合わせて新たな舞踊語彙を生み出し続けたヤコプソンを天才と評したが、海外公演でヤコプソン作品が披露される機会は少なく、現在もロシア国外での彼の知名度や評価は低い。

ソ連時代、ヤコプソンが学術的な研究対象になることは非常に少なかった。ソ連が崩壊し、2000 年代に入るとヤコプソンに関する研究は活発化したが、彼の創作活動についてソ連バレエ史の枠組みを超えて語られることはなかった。また、ソ連バレエ史においても、ヤコプソンは社会主義リアリズムやそこからの脱却というソ連バレエがたどったメインストリームから外れた天才として位置づけられてきた。そこで本論文では、彼のソ連バレエの主要な潮流に留まらない創作手法の源を、ダンスとバレエにおけるモダニズムの普及（本論では「舞踊モダニズム」とする）に求めた。舞踊モダニズムの観点からソ連バレエ史を見直し、そのうえでヤコプソンの経歴を再考し、舞踊分析を行い、これらを通して 20 世紀バレエ史における振付家ヤコプソンの位置づけを行った。

本論は 3 章構成で、内容は以下の通りである。

第 1 章では、従来のソ連バレエ史の記述を見直し、モダン・ダンスの波及効果も射程に入れた上でソ連バレエを再考した。第 1 節では、従来のソ連バレエ史記述で頻繁に説明に用いられてきたドラマ・バレエと舞踊シンフォニズムについて、それらの定義、成立経緯を確認し、欧米バレエ史との比較を行った。また、ソ連バレエにおける現代テーマのバレエ創作についての討論も追った。このことを通して、ソ連バレエにおけるヤコプソンの創作姿勢の根幹には現代テーマの追求があり、現代テーマのバレエ創作のために舞踊語彙を模索していたことを確認した。第 2 節では、ソ連、それから欧米におけるバレエとダンスのモダニズムを概観した。モダン・ダンスが盛んだったドイツとほぼ時を同じくして、ソ連にもモダン・ダンスが波及していたこと、物語が必ず必要だったソ連では抽象バレエは許容されなかったが、現代テーマのバレエ創作という形でバレエの

モダニズムが実現されたことが導き出された。

第2章では、ヤコプソンの経歴と創作活動を時系列に沿って記述した。第1節では誕生からバレエ学校での学び、バレエ団入団、そしてクラシック・バレエに反旗を翻したことによるレニングラードからの追放をたどった。この時期の創作活動は、振付家としての地位を確立する前に当たる。この時期の、クラシック・バレエを巡る議論への参加、モスクワでのクラシック・バレエ作品の創作、ソ連各地での振付家としての活動が、後のヤコプソンの創作姿勢を決定づけるものとなったことが確認された。第2節ではヤコプソンが手掛けた2つのおとぎ話バレエ『シュラレー』（1950年）と『ソルヴェイグ』（1952年）を取り上げた。第3節では、キーロフ劇場における、バレエ『スパルタクス』（1956年）から自身のバレエ団〈舞踊ミニアチュール〉創設前までの創作活動を取り扱った。キーロフ劇場でヤコプソンは現代テーマのバレエ創作に注力していたが、その中でも特に重要なテーマとして第二次世界大戦が浮かび上がった。ヤコプソンは戦争表象では独ソ戦だけでなく、ヒロシマの原爆の悲劇も取り上げている。第4節では晩年のバレエ団〈舞踊ミニアチュール〉での活動から死までを、第5節では死後の作品継承を取り上げた。第2章ではまた、出版物・アーカイヴ資料を用いて実証的な裏付けを行いながら、先行研究ではあまり取り上げられてこなかった部分を補完した。バレエ学校入学前の経歴や、反ユダヤ人キャンペーンが展開されたコスモポリタニズム批判の時期における創作活動がこれに当たる。

第3章では、ヤコプソンの舞踊語彙に着目した主要作品の舞踊分析を行った。ヤコプソン作品の舞踊語彙を、スポーツとアクロバット、クラシック・バレエと民族舞踊、プラスチックとホレオプラスチック、ネオ・クラシックとネオ・ロマンティックの4つに分けたうえで作品を分類し、舞踊語彙の変遷とともに舞踊語彙と舞踊モダニズムのつながりを追った。このことを通し、ヤコプソン作品において舞踊モダニズムがどのように表出したのかを分析した。基本的に映像資料が残っている作品のみを対象とし、分析にあたっては主に映像資料を使用し、補足的に文献資料やアーカイヴ資料（振付案・台本など）を用いた。

舞踊分析の結果、ヤコプソンの舞踊語彙は、大きくクラシック・バレエとプラスチック（・ホレオプラスチック）の2つに分けることができた。ヤコプソンは、創作初期～中期において、ロシアにおける舞踊モダニズムの影響を受けながら、より自由に創意工夫を発揮できる舞踊語彙としてプラスチックを選び、彫像や壺絵、フレスコ画を動かすプラスチックや、ジェスチャーやパントマイムを舞踊風につなげることで様々な人物表象を可能にするホレオプラスチックを多用した。プラスチックやホレオプラスチックは、クラシック・バレエの語彙を「生物力学的なアルファベット」に解体したうえで再構築することで生み出されている。一方、クラシック・バレエに対してもヤコプソンは常に思考をめぐらせており、1930年代からすでにクラシック・バレエの腕の規範を壊すなどして、ネオ・クラシックに取り組み始めている。バレエ学校やバレエ団のために振付けた小品や『シュラレー』、『ソルヴェイグ』など民族舞踊と融合した作品でクラシック・バ

レエの舞踊語彙を使用し、例えば『シュラレー』ではクラシック・バレエの規範の中で新たなパの組み合わせを生み出した。『エグゼルス XX』(1971年)では、第5番ポジションの足の向きを180度内転させた第6ポジション(クラシック・バレエの足を平行にする第6ポジションとは異なる)及びそれに基づいた内向きのパを提案した。ヤコブソンは、プラスチカをクラシック・バレエの上に再構築していたが、同様にクラシック・バレエそのものもネオ・クラシックに再構築したことが導き出された。ヤコブソンの創作には、このようにクラシック・バレエとプラスチカ(・ホレオプラスチカ)の2つが基軸として存在していた。ヤコブソンの創作活動はバレエとプラスチカの狭間を絶えず行き来しながら続けられ、それは晩年、ネオ・クラシックに結実したのである。

結論では、ヤコブソン作品は次の4つのモダニズムで位置付けることができるとした。1つ目はスポーツとプラスチカである。プラスチカは、本論では彫刻を参照したゆっくりとした動きを指すものとした。モダン・ダンスではプラスチカからスポーツへと流行が移行していたが、これを逆行する形でヤコブソンはスポーツからプラスチカへと主軸を移して創作を行った。2つ目はこのプラスチカの中の戦争表象、ヤコブソンが常に追いつけてきた現代テーマの一つ、第二次世界大戦である。ヤコブソンは彫刻やダンカンの自由舞踊、絵画からインスピレーションを得た創作を行った。『死よりも強く』ではソ連兵を描き、『母』では子を失った母親を取り上げ、共通して独ソ戦の戦争記念碑の典型的なモチーフが用いながら、戦争による心身の傷を鮮明に表現した。プラスチカや自由舞踊で表現された物語は、その後物語性が排除され苦痛そのものにフォーカスしたホレオプラスチカで構成されたバレエ『ヒロシマ』につながってゆく。3つ目は、プラスチカからホレオプラスチカへの移行である。彫刻を元にしたプラスチカに対し、主に絵画が参照されたのがホレオプラスチカである。ホレオプラスチカは、本論では人物・物語描写のためのパントマイムと踊りの融合とした。プラスチカやホレオプラスチカでは、クラシック・バレエの技法は否定され、その作品ごとに作られた舞踊語彙は、より豊かな感情表現も可能にした。4つ目はバレエのモダニズムである。ヤコブソンは、創作活動の最初期からクラシック・バレエの命運に思いを馳せ、その万能性を否定し、現代を描くうえではクラシック・バレエの舞踊語彙としての可能性に疑念を抱いていた。一方で、クラシック・バレエを完全に放棄したわけではなく、その定型を壊しながら、新たなクラシック・バレエの形を模索し続けた。同時代の欧米の振付家からネオ・クラシックの影響も受けながら、クラシック・バレエの前史からネオ・クラシックまでをたどった創作を行った。以上のことから、ヤコブソンは、常にソ連バレエの中に身を置きながらソ連バレエの文脈を超え、広く欧米のモダン・ダンスやモダン・バレエの潮流と呼応しながら創作を行っていた振付家であったと結論づけることができる。